



植田郁男さま

『いちばん しあわせな おくりもの』

**宮野聡子 作・絵
教育画劇**

一昨年の冬のことである。私の心臓に異常が見つかり、手術が必要だと言われた。これまで大病とも大怪我とも無縁の人生。手術はもちろんのこと、入院もしたことがなかった。しかも、手術では一度心臓を止めるという説明を医師から聞かされていた。

生来、臆病な性格の上に、何でも悪い方へ考えてしまう私は、もし止めた心臓が動き出さなかったらどうしようと怯えた。どうしようも何もない。心臓が動かなければ、この世にさよならと言うしかないのだ。

手術の日が決まってからというもの、不安のあまり、食欲は失せ、不眠症に陥ってしまった。そんな中で、とある日曜日のこと。どうにも体が重く、ソファーに横たわって微睡んでいると、娘の声がすぐ傍から聞こえてきた。

「もりのはずれに、ふたつのいえがありました」

その出だしだけで、私はすぐに思い出した。娘がまだ幼稚園に通っていた頃、大のお気に入りだった絵本だ。くまくんのことが大好きで仕方がないこりすが、くまくに喜んでもらいたくて、様々なプレゼントを提案するのだが、くまくんは「なんにもいらないよ」と言う。

「きみとここにいるだけで、ぼくはとてもしあわせなんだ」

そうして、くまくんとこりすは、仲良く一緒に暮らし始めるところで物語は終わる。

娘の、突然の読み聞かせだった。読み終えた娘に、「どうしてこの絵本を読んできたの？」と思わず尋ねた私に、娘はこう答えてくれた。

「私もくまくんと同じ気持ちだから。パパが元気で一緒にいてくれたら、幸せだから」

気が付くと私は、泣きながら娘を抱きしめていた。そして、「手術頑張るからね」と約束したのだった。私の心を救ってくれたのは、娘からの幸せな贈り物だった。

手術は無事に成功し、娘はこの春、中学生になった。その絵本は、娘の部屋の本棚に、多くの本に挟まれて今も残っている。

いつの日か、娘の大切な人に、読み聞かせてあげるつもりなのかもしれない。